

## 「特集」に寄せて

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所  
邦文紀要『メディア・コミュニケーション』編集担当  
『メディア・ステレオタイプング』プロジェクト代表  
萩原 滋

現実社会に関する人々の認識は、直接的経験よりも間接的経験、とりわけメディア情報に負う部分が大きい。従って、人々の社会的視野を広げるうえで各種メディアは多大な貢献をしているが、そうした情報に歪みや偏りがあるとすれば、その弊害もまた大きいと言わざるを得ない。本号では、偏見や差別に結びつきやすいステレオタイプの構築という点でのメディアの影響力、特に日本社会に広く浸透して多くの人々の主要な情報源となっているテレビのステレオタイプング機能を外国・外国人イメージを主題として広範かつ多角的に分析することを目的として平成13年度に発足した『メディア・ステレオタイプング』プロジェクトからの中間報告を特集している。

ステレオタイプに関する社会心理学的研究の歴史は古く、従来は人種や職業など特定のカテゴリーの人々に付与されるイメージの把握に重点が置かれていたのに対して、最近ではステレオタイプの形成、維持、変容に関わる認知的メカニズムの解明を主眼とする研究が圧倒的に多くなっている。いずれにしろ多くの人々の共通認識、合意性の高さをステレオタイプの要件とするならば、マスメディアの果たす役割を無視し得ないはずである。しかしながら、これまで

の社会心理学的研究では、ステレオタイプの形成、維持、変容に関わるメディア情報の影響力を正面から取り上げようとするような動きは顕在化していない。

一方、メディア研究の分野では、従来からドラマの登場人物のジェンダーや人種・民族などに焦点を合わせた内容分析的研究が蓄積されているが、それはアメリカを中心としており、日本での研究例は乏しい。また人々の社会認識に及ぼすテレビの影響に関しては培養理論に基づく分析が行われているが、それは主として暴力に関わる現実認識に限定されており、ステレオタイプの構築といった視点や問題意識は欠如している。

このプロジェクトでは、これまでの社会心理学的研究とメディア研究の成果を統合しうるような道筋を示すことをひとつの目標としており、そのためにまず文化的背景を異にする多数の外国人が出演して硬軟取り混ぜた多様なテーマに関して盛んな論戦を繰り広げた『ここがヘンだよ日本人』（TBS系）というバラエティ番組を素材として、そこでの言動を通じて提示される外国人イメージや外国人出演者が抱く日本人ステレオタイプの分析を試みると共に、その結果を踏まえて質問項目を作成し、番組の視聴効果を探るための調査を実

施することにした。平成11年10月から3年半にわたって継続してきた同番組は、平成14年3月に終了しており、それを待って平成14年5月末から6月初めにかけて大学生を対象とする調査を実施したわけだが、それはまた日韓共催のワールドカップの開幕（5月31日）を間近に控え、各種メディアに世界各国の代表チームの動向に関する情報があふれ始めた時期でもあった。

ワールドカップ開催に際して、フリーガンの脅威がしきりに喧伝され、サポーターといった、従来からの観光やビジネス目的とは異質の外国人が、数多く来日することが予測されており、それは日本人の外国・外国人イメージに大きな変容を迫る機会となる可能性が高いように思われた。そこでワールドカップ開幕前の5月23日から閉幕後の7月5日までの1ヵ月半にわたって在京3局（NHK、TBS、テレビ朝日）の夜のニュース番組、スポーツニュース番組をビデオに収録してワールドカップ関連情報の内容分析を行うと同時に、ワールドカップ閉幕直後（7月初め）と3ヶ月後（10月初め）の2時点で、最初の調査と共通の項目を含む質問紙を用いて調査を実施し、この間における日本人の外国・外国人イメージの変化の様相を検討してみることにした。

さて本号の特集には、6篇の論文が収められているが、そのうち最初の4篇は『ここがヘンだよ日本人』の内容分析に基づくものである。まず萩原論文で全体的な番

組の特質と分析枠組を提示し、さらに国広論文ではジェンダー・ステレオタイプ、有馬・山本論文では日本人ステレオタイプ、金論文では女子高生のイメージに焦点を当てた分析結果を報告している。残りの2篇は、いずれも大学生を対象とした質問紙調査に基づくものであるが、大坪・相良・萩原論文では、第1回目の調査結果から番組視聴が諸外国に関する知識やイメージに及ぼす影響を検討しているのに対して、上瀬・萩原論文では、3回の調査を通じてワールドカップ開催による外国・外国人イメージの変容の形跡を探ろうとしている。

当初から3年を予定している本プロジェクトは、ようやく折り返し点を過ぎたところである。これからワールドカップに関するテレビ報道の本格的な分析作業に入ることになるが、『ここがヘンだよ日本人』の構成表や3回にわたる調査データの分析を今後も継続していくと共に、バラエティや報道番組以外のジャンルも視野に入れて、テレビというメディアのステレオタイピング機能についてさらに研究を深めていくつもりである。

なお本研究プロジェクトに対しては、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の研究・教育基金以外に、放送文化基金及び文部省科学研究費（基盤研究C）による資金補助を受けている。まだプロジェクトが完了したわけではないが、その中間報告に際して、ひとまず関係者各位に謝意を表しておきたい。